



YUZABURO MOGI

東武鉄道株式会社 監査役
キッコーマン株式会社 取締役名誉会長 取締役会議長

茂木 友三郎

歴史的な転機を乗り越え 堅実さに挑戦心を兼ね備えた企業に

東武鉄道とキッコーマンの間には、長い歴史のご縁があります。

千葉県野田市には、17軒の醤油醸造業者からなる「野田醤油醸造組合」という組織がありました。製造した醤油の輸送経路の確保のため、組合は千葉県に働きかけ、1911年に千葉県営軽便鉄道の野田町～柏間が整備されました。その後、千葉県がこの鉄道の払い下げを行う方針を打ち出し、運営を引き受けたのが、当時、設立されたばかりの「野田醤油株式会社（現在のキッコーマン）」でした。運営会社として「北総鉄道株式会社※」（のちに「総武鉄道株式会社」に社名変更）を設立し、醤油の鉄道輸送を自前で手掛けることになりました。太

平洋戦争が始まると、政府は戦時体制を固めるために企業同士を合併させ、産業の集約化を図ります。総武鉄道も例外ではなく、その合併相手となったのが東武鉄道でした。こうして1944年に誕生したのが東武鉄道野田線です。

以来、現在に至るまで、両社は親密な関係を築いてきました。キッコーマン創業の地は千葉県野田市で、東武鉄道の営業エリアとも重なります。地域的な気質が共通するのか、堅実な社風には近いものを感じます。高等学校時代の通学に3年間、毎日利用していましたので個人的に大変なじみ深い鉄道会社でもありました。

父・茂木啓三郎は20年近く東武鉄道の監査役を務め、

私も2001年に監査役に就任しました。根津嘉澄会長が社長に就任されたのがその2年前の1999年でしたから、社長として活躍されたご様子の大半を、私は監査役として間近で見えてきたこととなります。

根津会長は真面目で勉強熱心な、大変立派なお人柄の方です。経営者としての手腕も素晴らしい。その功績として最も印象に残っているのは、なんといっても東京スカイツリーを中心とした大規模複合開発プロジェクト「東京スカイツリータウン事業」を成功させたことです。電波塔としての社会インフラ機能に加えて、商業施設、観光拠点としての魅力も備えた壮大なプロジェクトでした。実は私も根津会長も浅草寺の信徒総代を務めており、東京スカイツリーが完成して以降、参拝者が明らかに増えたと聞き、感銘を受けました。東東京エリアの人の流れを変え、地域活性化に大いに貢献したのは間違いありません。

1つの事業の成功が、企業価値を飛躍的に高め、社風やブランドイメージを大きく変えるのを、私は経験上よく知っています。キッコーマンの醤油工場を米国に建設し、現地生産すべきだと上司に進言したのが1965年、私が30歳の時でした。1971年にはこの建設プロジェクトが正式決定され、グローバル企業への転換を遂げる上での大きな契機となりました。

東京スカイツリータウン事業も、東武鉄道にとっての歴史的な転機となりました。世界一高い自立式電波塔の建設を含め、過去に例のないチャレンジングなプロジェクトで、工場建設計画とは比較にならぬ極めて難しい経営判断だったはずですが、それでも当時の根津社長は精緻な検討を重ねて決断し、見事成功に導きました。東武鉄道が果敢にリスクをとって未知の領域に挑戦する企業であると世間に示したのです。

根津会長の功績としてもう1つ強調しておきたいのが、東武鉄道の取締役会や監査役会の機能を活性化し、コーポレートガバナンスを強化したことです。社外取締役や社外監査役を積極的に取り入れたことはもちろん、外部視点からの質問を前向きに受け入れ、それに

議長として丁寧に答え、活発に議論する雰囲気が醸成されています。コーポレートガバナンスが充実し、取締役会・監査役会と経営陣との信頼関係が構築できている企業は、イノベティブな事業にも意欲的に挑戦できる。これは東武鉄道の未来に向けて、大きな強みになっていくはずだと感じました。

2023年6月、都筑 豊氏が代表取締役社長・社長執行役員に、根津嘉澄氏は代表取締役会長に就任され、新たな経営体制がスタートしました。就任される以前から取締役会などの場で都筑社長には何度もお会いしていました。経験も豊富で、常に多角的に物事を捉える姿勢が印象に残っています。根津会長も良い人物を後任として選ばれたと、率直に感じました。

人口減少に加えて、働き方改革やコロナ危機とデジタルテクノロジーの普及に伴う人の移動の変化、インバウンドの増加など、未来に向けて鉄道会社に対応しなければならない課題は数多くあります。すでに新型特急「スペースX」事業など、新しい移動価値の提案が始まっており、こうした挑戦がますます重要になっていくでしょう。長年培われてきた堅実実直な社風、東京スカイツリータウン事業を契機にさらに育まれた挑戦する企業姿勢、優れたコーポレートガバナンスという3つの強みを武器に、ますます発展されることを祈念しております。

※ 現在の北総鉄道株式会社とは別会社

